

(4) 遺伝カウンセリングにおける遺伝カウンセラーの自己開示がクライアントへ及ぼす影響

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻修士課程 ○安達 容枝
川崎医療福祉大学医療福祉学科 升野 光雄
川崎医療福祉大学医療福祉学科 山内 泰子
川崎医療福祉大学医療福祉学科 井上 信次

【要 旨】

〔背景〕

遺伝カウンセリングでは、クライアントの自律的意思決定支援のために正確な情報提供と心理社会的援助が基本理念とされる。遺伝カウンセラーは遺伝的問題がもたらすさまざまな悩みや不安を解決するために問題の整理をし、クライアント自身による遺伝学的検査や医療マネジメントの選択を支援する。クライアントは遺伝的問題という混乱の中におり、「あなたが私だったら、どのような選択をするか」と遺伝カウンセラーによく問いかける。そうした時、どのように応えることがクライアントにとって納得できる意思決定支援として適切であろうか。

〔目的〕

遺伝カウンセリングにおいて、クライアントからの質問に対する遺伝カウンセラーの対応には個人的な意見を示さない非自己開示が実施されている。臨床心理領域では、自己開示も対応の1つに含まれている。本研究では、クライアントから「あなたが私の立場だったら、どのような選択をするか」を尋ね

られた場合の遺伝カウンセラーについて、遺伝学的検査の選択における応答に限定して、非自己開示と自己開示について比較検討する。

〔対象及び方法〕

大学生を対象とした無記名自記式質問票調査である。質問票では①属性（性別、年齢、遺伝カウンセリングの経験等）、②遺伝性腫瘍における遺伝学的検査選択についての遺伝カウンセリング場面を設定し、クライアントからの「あなたが私の立場だったら、どうするか（遺伝学的検査を受けるか否か）」という質問を含む逐語を提示した。これに対する遺伝カウンセラーの応答例3種（非自己開示・専門的自己開示・個人的自己開示）について、意思決定支援を含む遺伝カウンセリングの良否と遺伝カウンセラーの印象を尋ねた。

〔結果〕

A 県内の医療福祉系大学の基礎教育科目である生命科学を受講している学生（105名）を対象として調査を実施した。遺伝カウンセラー応答例の3群に分けて解析を行っている。この結果を報告する。